

同志社スポーツの 将来を展望する

●出席者

うえやまともひろ
上山友裕氏 (リオデジャネイロパラリンピック アーチェリー日本代表)

みちながひろし
道永宏氏 (同志社大学体育会監督会幹事長/モントリオールオリンピック銀メダリスト)

なか おあきら
中尾晃氏 (全同志社中高大課外活動連携制度(強化型)指導者/同志社大学ラグビー部GM)

こじょうまさひろ
古城正裕氏 (同志社国際中学・高校テニス部監督)

●司会

かわいけいじ
川井圭司氏 (同志社大学政策学部教授/専門：スポーツ法学)



同志社スポーツの現状

川井 ●本日は同志社スポーツのあり方と今後の展望をお話しいただきます。法人内各学校がどう連携して、スポーツの一貫教育を実質的なものにしていくのか。今回のリオデジャネイロオリンピック（以下、リオオリンピック）には、同志社大学から卒業生3人、パラリンピックでは本日お越しの上山さんが出場されました。4年後の東京オリンピックへの出場も視野に入れながら、法人内連携の中で同志社アスリートへのサポート、強化をどう行っていくのが望ましいのか。中学、高校、大学、それぞれの視点で皆様からご意見をいただければと思います。まず、各校のスポーツの現状をお聞かせください。

中尾 ●大学のラグビー部は、現在部員がスタッフを入れて約170人という大所帯です。法人内各学校との連携につきましては、5月5日にラグビー祭があり、そこで中学校・高等学校ラグビー部交流試合、いわゆる「総長杯」の試合をしたり、小学校のスクールの子には大学生が教室を実施したりという活動をしていま

す。もともと総長杯という形を取ったのは5年前で、ラグビー祭そのものは何年も前から行っています。同志社ラグビーに関係する人全員が集まって共に練習をしたり触れ合ったりする目的から始まっており、同志社ラグビーにとつては大事な一日だと思っています。

川井 ●ありがとうございます。次に国際中高の古城先生から、高校の課外活動の例ということでテニス部のお話をお願いします。2016年には国際高校テニス部がインターハイに初出場するという、歴史的快挙を遂げました。この辺りについてもお話いただけますか。

古城 ●まず部員数は約30人です。初心者から、世界ランクで言えば恐らくジュニア100位を切るくらいのレベルの選手までが混在しています。有名選手を入学させることのできる学校ではないので、一から選手を育てていますが、創部37年間のうち半分以上は京都のベスト4以上に入っています。いかに練習量を少なくして、いかにトップに入るのかという工夫を常に課題にしています。25年ほど前から週3日制で部活をしていましたが、

4年前から週4日制に変えました。生徒たちはこの6年間でチャレンジしたことがあります。トレーニングとしてのランニングをさせないようにしました。少くとも今の中心メンバーの高校3年生は、在籍した3年間はトレーニングとしてのランニングの経験がありません。非常に大きなチャレンジでしたし、スポーツを少し甘く見ていると言われればそれまでですが、その時間をテニスの練習に割こうと考えました。何かに振り回されないで、自分の信念をもつて進めることを中心にやってきて成功したチームです。

川井 ●週4日制にされた理由を教えてください。

古城 ●学校が土曜日に授業をするようになったため、せっかく登校したのにそのまま帰らせるのが少しもつたいないと思つたのが理由です。学校の授業に影響を受けた形で土曜日にもう1日練習を入れました。

川井 ●そもそも練習日が週3日や4日と少ない理由は何ですか。

古城 ●3日にした理由は、まず練習に飢えた状況を作りたかったからです。毎日

長時間の練習をすると、雨が降った時に選手が喜ぶのです。このように思わせたくなかった。そこでとりあえず練習量を少なくして、雨が1日降れば練習日がさらに減つて週2日になるよと言って、1回の練習の大切さを分かってほしかったのです。また1回に使えるコート数は中高男女で6面しかないため、一度に2面、3面を借りて、しっかりと練習させ、その代わり週の練習日は少なくする。空いた時間は同志社の多々羅キャンパスのコートを借りたり、もしやりたければ自主練習で補つていいよという形にしています。

川井 ●ありがとうございます。中尾さんも昔の指導と、現在の制約された中での指導との差をお感じでしょうか。

中尾 ●今は、やはり練習時間が短いですね。特に冬などは1時間も無いぐらいです。その中でいかに練習を組むかで腐心します。基本的な部分と、楽しさという要素を入れながら、いかに走らせるか、といった組み合わせを常に考えています。

同志社スポーツの印象

川井 ●ありがとうございます。次はお一

人ずつスポーツのご経験と、同志社スポーツの印象などをお願いします。

上山 ●私は2000年に同志社香里中学校に入り、同志社香里高校から同志社大学商学部に進みました。小学校からやっていたスポーツはラグビーです。NTTドコモに行った川端正樹さん(2010年・経済学部卒)と同じ小学校でずっとやっていたので、中学でも一緒にやろうということを始めました。中学3年生の時に怪我が重なって続けられなくなり、高校ではスポーツをしなかったのですが、2006年に大学でアーチェリーを始めました。そこで出会ったのが、かつて高校日本代表だった福田圭宏さん(2010年・商学部卒)です。福田さんから多くのことを吸収しながら、個人で全国大



上山 友裕氏
リオデジャネイロパラリンピック
アーチェリー日本代表

ん、お願いします。

中尾 ●私は中学からラグビーを始めて、天理高校時代は寮生活でラグビー漬けの生活でした。2年生の時に全国優勝し、3年生で国体優勝、個人的にも高校日本代表に選ばれました。同志社大学に入学したのは、平尾誠二さんと大八木淳史さんが中心となった3連覇の翌年です。とにかく、強い同志社でやりたいという思いがありました。試合に出られるようになったのは2年生頃からで、3年生でレギュラー、4年生でキャプテンになりました。同志社スポーツは、スパルタ式だった高校時代とはまったく違う世界でした。同志社の練習で最初に思ったのは「なんでこんなに楽なんやろ」ということです。その雰囲気慣れるのに半年くらいかかりましたね。一番きつかったのは4年生の時です。同志社ラグビーは「自分たちで考え、自分たちでチャレンジする」というスタイルです。そんな選手たちを、練習、選考、試合について、キャプテンである私が責任をもってまとめていかないとイケません。最後には大学選手権で怪我をするなど、挫折の経験もありますが、色々な

会出場を目標にして頑張りました。同志社の運動部は、高校から競技をしているスポーツ推薦入学の部員だけでなく、未経験者でも受け入れてくれる環境が良いと思います。そのおかげで私も大学からアーチェリーを始めることができました。リオオリンピックにウインドサーフィンで出場された伊勢田愛さん(2010年・商学部卒)も大学に入ってから競技を始められたそうですね。同志社だったからこそできたことだと思います。

川井 ●ありがとうございます。道永さん、お願いします。

道永 ●私がアーチェリーを始めたのは4歳です。近くにあったアーチェリーの練習場に両親に連れていかれたのが最初です。小学校は陸上、中学では器械体操をやっていました。本格的にアーチェリーを始めたのは高校からです。世界チャンピオンの中本新二さんや日本チャンピオンの赤沢実さんが同じ練習場にいましたから、その人たちが何とか追い越せないかと必死になって、夜の11時、12時まで練習していました。高校1年生から全日本一般の部に出ていて、2年生の時に

は社会人大会で、高校生なので表彰対象にはなりませんでしたが優勝しました。

同志社大学に入ったのは、ミュンヘンオリンピックに出られた日比野正嗣さん(1973年・経済学部卒)とナシヨナルチームの合宿で一緒にしたご縁からです。その後、大学2年生でオリンピックの日本代表になり、結果的に銀メダルを取ることができました。その時に体に相当負荷をかけたので秋口くらいに肩を痛め、それからは肩をかばいつつ、ごまかしながらやっていました。

川井 ●特に同志社大学の中で感じられたことはありましたか。

道永 ●私たちが今の学生と決定的に違うのは、昔はアーチェリーに没頭できたことです。携帯もポケットベルも無い時代ですから、いったん家を出れば誰も私をつかまえることはできません。同じように全日本を狙う仲間が男女ともいましたので、競い合いながら、同志社のアーチェリー全体が大いにレベルアップした時代だったと思います。同志社が3年連続王座についた時代でした。

川井 ●ありがとうございます。中尾さ

経験をさせてもらった4年間でした。

川井 ●古城先生にも同じ質問をさせていただければと思います。

古城 ●私は小さい時からずっと器械体操をしていて、テニスを始めたのは大学からです。まったくの初心者からのスタートでした。体操は怪我が怖かったのと、西日本大会まで行けたことをきっかけに体育教員を目指しましたので、器械体操と武道ができるから、それ以外に何か球技をしようというのが、テニスを始めた動機でした。私たちの代は、ちょうど同志社大学が非常に強い時でした。大勢の憧れの選手の中でテニスができましたし、今も日本のトップには同志社の卒業生が大勢おられます。私自身は非常に軽い気持ちでテニスを始めましたので、大学時代は皆さんのように全日本レベルなどの経験はありません。社会人になってからは指導の方が楽しかったのですが、約25年のブランクを経て競技を再開し、最終的には全日本10位くらいの人に競れるか勝てるかというレベルまで行き、2009年の全日本57位がランキングとしては最高です。

学校スポーツはどうあるべきか

川井 ●ありがとうございます。次は私にとって一番関心のある論点です。学校スポーツのあり方について、色々な角度からお話しいただきましよう。現役時代に感じられたこと、現在部活などに関わっておられる中で感じられること、変えていく必要のある課題があればお示しください。特に大学ではスポーツの産業化を進める動きがあります。お金を生む仕組みを作るといふことなので、学生にとっではより活性化できるというメリットがあります。一方で、教育的な部分は商業主義の中でどこへ行くのか、といった議論も今後始まっていくと思います。

古城 ●まず私の中では、高校生、中学生にスポーツを指導する際の哲学があります。勉強との両立です。試合などで欠席する場合に他の教員から理解を得るためにも、テニスにとつぷり浸かっているような雰囲気を作ることができるだけ出さないように神経を遣っています。

川井 ●先程は、練習日を制限して生徒たちに飢えさせる状況を作りたかったとい

うお話もありました。あるいは勉強もしてバランスを取るといった価値観は、そもそも昔からお持ちでしたか。

古城 ●いえ、私自身は体育会でもやってきましたのでスポーツをもっと進めたかったのですが、国際中高が、それを進められるような雰囲気ではありませんでした。そこに私が適応していった形です。

川井 ●先生が適応していく中で、生徒はどのように変化していききましたか。

古城 ●私が勤め始めた頃はスパルタで、凄く厳しく指導していました。そこから徐々に指導形態を変えていったので選手の変化はあまりわかりませんが、過去と比較すれば今の選手は周囲に対する思いやりが出てきたように感じます。例えば雨の試合会場で、コートの水を取りながら試合が進んでいた時のことですが、大会本部にスコアを報告してきた選手が小走りにコートへ戻るのを見てみると、コートの水取りをしている1年生に傘を差し出しに行っていました。指導者が選手を痛めつけると、選手は次に他を痛めつけていきます。上級生になつたら威張るようになるのではなく、後輩を思いやる

現在はそういう姿勢が、かなり少なくなっているのではないのでしょうか。本来自分たちの責任においてすべきことについて、かなり指導者の息がかかっているように感じます。同志社なら、その部分は少なくともいいのではないのでしょうか。それが伝統だと思われ、そのような大学であつてほしいです。

道永 ●私は選手、監督、監督会の幹事長、スポーツユニオンの一員という立場にあります。「強い同志社でなければならぬ」というのは「勝たなければならぬ」という意味なのでしょうが、どのレベルで勝つのかという問題があります。初心者からオリンピックを目指す者までが共に活動するのが同志社スポーツです。極端に言えば、中には良い就職先を見つけないために体育会に入る人もいます。その学生たちにインカレを目指そうと言つて意識をインカレまで持つていくことは、恐らく無理ですよ。でも、そういう学生たちには、地区や地域での大会を目指させる。あらゆるレベルの学生と一緒にして考えるのは非常に難しいですが、学生の競技レベルによつてクラブの対応は変

のが先輩だという優しい雰囲気生まれできました。

川井 ●中尾さんは大学の監督として、あるいは連携指導者というお立場から中学校・高校を見た場合、同志社スポーツはこうあるべきだ、あるいは変えていかなければならないと考えておられる課題があればお願いします。

中尾 ●最近では企業でも大学でも、強化にはとにかくお金が必要と言われます。指導者、栄養管理、競技の分析にもお金が要ります。大学ラグビーでも、社会人が取り組んでいることをそのままやろうとすれば、とんでもなくお金がかかります。大学生が同じ事をできるかといえば、まづできないでしょう。限られた範囲の中で、如何に工夫して努力することから生まれるものも、大事にして欲しいと思います。

同志社スポーツのあり方を考える

川井 ●同志社としては、もちろん強くなくてほしい。一方で、スポーツのみに特化すべきではないという、色々な価値観のバランスが求められるように思います。皆さんが経験されたこと、客観的に同志

わつていく必要があります。過激な発言になりますが、解決策の例としては、クラス分けという考え方もあります。今、オリンピックで金メダルを目指そうとすればマンツーマンのコーチングが必要ですが、一人ひとりにコーチがいるのが理想ですが、まず大学では不可能なことなので、クラス分けという考え方があってはならないでしょうか。

「スーパーマン」は必要か

川井 ●ありがとうございます。ただ、色々な人が関わっていく中で強みもあると思います。今おっしゃつたように本当にトップの選手を育成するには、ある種のエリート主義というか、カテゴリ別の強化対策が必要というお考えだと思つていますが、それは同志社社なのではないでしょうか。もちろん「強くなること」を最優先課題とするのであれば、その方法でいいと思いますが、それが本当に同志社社なのではないでしょうか。皆様からご意見をいただければと思います。
道永 ●極端に言えば、同志社は「スーパーマンを育てよ」という立場ですよ。スポーツも勉強も、何もかもできるスー

社スポーツを見てお感じになることをお聞かせください。

古城 ●私は選手のリクルートのために色々な大会を観察しています。同志社教育と結びつけていくのであれば、最近では選手自身の自立度に着目しています。大学に入つてからは指導された通りにトレーニングをするのではなく、弱点を指摘されれば自分で考えて対応していける選手、スポーツマンとして基礎的なことをある程度理解できていて、なおかつ理解力や知識の面で優秀であり、かつ自分の周りのことがきちんとできる選手。そういう自立した選手に将来性を感じます。その時の瞬間的な戦績よりも、自主自立の精神を見る必要があると思います。

中尾 ●先程言いましたが、大学4年生でキャプテンをやつた時が一番しんどかつたというのは、とにかく精神的にしんどかつた。考えることが一番きつかつたです。そして、それが同志社の教えではないかなと思います。自分たちで考え、自分たちで取り組む。だめだつたら自分たちで反省する。岡仁詩先生（故人・元大学名誉教授）からも言われたことです。



道永 宏氏
同志社大学体育会監督会幹事長
/モントリオールオリンピック
銀メダリスト

パーマンを育ててくれと。体育会長の沖田行司先生がよくおっしゃつてるのは、「何もかも中途半端にできる人間を推薦入試で入学させるのか、あるいは何かに秀でた人間を取るのか。どうするのかをこれから考えていかないとけない」と。知・徳・体を求める今、同志社は、何もかも中途半端にできる人間を育てているのかなというようにも感じます。オリンピック出場を目指す場合、同志社の学生は大変だと思います。本当にスーパーマンを目指さないとけない。ある大学の学生は一つができればいいという現状があります。スポーツというのは本当に過酷な勝負です。1つの種目に1万人の競技者がいれば、その年のチャンピオンは1人です。9999人は負ける。すると、

負けることに慣れてくるんですね。今の同志社のアーチェリー部の学生たちもそうですが、負けても悔しがらない。体を張って本気で悔しがることなく、そのまま卒業してしまう学生もいます。本当に高い所を目指している学生からしか「悔しい」という言葉は出てこないと思うんです。今の学生たちは練習と勉強のやり繰りが大変ですね。私たちの時に比べて凄く努力をしているのですが、本気で悔しがるまで打ち込める時間や環境が無いのかなと思います。

川井●ありがとうございます。私はその制限の中で、理想論かもしれませんが、さらに上へ行くアスリートが同志社から育ってほしいなと思うのですが。

道永●そもそも、そのスパーマンを育てるのかどうかという問題があります（笑）。**川井**●スパーマンを育てる仕組みを作るのか、あるいは十年に一度のスパーマンの出現を期待しうる仕組みにするのかという問題でしょうか。私は後者のイメージです。最初からスポーツだけに没頭すれば良いという発想は、同志社らしさを失うと思うんですね。ある大学では確

かにやっていることと思いますが、その大学と同じ土俵で戦おうとすることが本当に良いことなのか。もちろん、バランスの問題であると思いますが、同志社は今後どちらを選びますかという選択を迫られているのだと、個人的には感じます。

上山●今のお話を伺っていて思ったのは、まず選手強化のために、ある程度お金をかければ、ある程度のレベルまでは行くと思います。実際にアーチェリーでは、冬は寒い屋外で練習していますが、お金をかけて室内練習場を作ればそこで効率の良い練習ができるでしょう。ではお金をかけるだけで本当に強くなれるのかと問われたら、それは違うと思います。お金をかけている学校では、強い選手は出てきますが、全員が強くなるわけではありません。環境が整わないのであれば、同志社の選手はそこでどうすればよいのかを自分で考えるんですね。監督の言われた事だけではなく、色々な所からの意見を取り入れ、自分に合うスタイルを自分で考えて作っていく。スタイルを確立した上でやっていくけば、またそこから成績は伸びていくと思います。お金をかけ

ることは必要ではあるでしょうが、その上で同志社大学生としての頭の良さを使っていかなければと思います。

留学の効果と留学生起用の是非

川井●例えば特定のスポーツにおいて、非常にレベルの高い海外の大学に留学するのはどうでしょうか。アーチェリーの強豪国はどこですか。

川井●そういう国への留学は競技力向上の視点から見た支援としても可能性があると思います。いかがでしょうか。

道永●うちの学生も今年の夏に1カ月韓国へ行きました。韓国語の勉強もできましたし、非常に有意義な形で帰国しました。アーチェリーの指導者になる目標を持って大学で頑張っています。

上山●韓国に留学した学生と一緒にチームで試合に出た時、「日本には無い、韓国のトレーニング方法を学べた。世界が広がった」と話していました。世界のトップクラスの国で勉強するのは本人にプラスになったし、帰国して私たちにフィードバックすることにより、チーム全体

にもプラスになったと思います。

古城●テニスではあまりそういうことはやっていません。私は日本の代表チームを連れてアメリカ遠征をしたことがありますが短期間でした。私自身も3回、アメリカへテニスを習いに行きました。そのおかげで向こうの凄さを感じることはできましたが、果たして本当に核の部分まで変わったかは疑問です。今は情報化でネットを探せば色々な練習方法が出てくるので、現在はその情報を指導に役立てています。

川井●体育会の学生がいわゆる交換留学でのチャンスを得られる、あるいは高生生の時にスポーツ留学を1年間させるという形で育ててゆくのは可能でしょうか。**古城**●素晴らしいことでしょうかけれど、1年間大会を抜けることの方が、彼らにとつては明らかにハンディを抱えてしまうと思います。最近では2人、中3から高1にかけて1年間オーストラリアにテニス留学させましたが、そのタイミングが精一杯ですね。帰国したら活躍してほしいし、高2、高3で抜けられると選手として活用させる期間が短く痛い。大学でもそう



古城 正裕氏
同志社国際中学・高校テニス部監督

いう同じような問題は起きると思います。

川井●アーモストの話になりますが、日本が「体育」を導入したきっかけは、アーモスト大学の体育でした。彼らのアスレティック・デパートメントはアメリカ最古の歴史を持ちます。そして体育会、アメリカでは「パーシテイ」という言い方をしますが、アーモスト大学ではそこに参加している率が非常に高い。そういう意味では「学生ファースト」の中でアスリートとの両立をさせ、国際的にも幅広く活躍できる学生を育てるという視点をもっている。同じことの真似はできないと思います。その大学が創立者の出身校であるという贅沢な環境を、同志社大学はぜひ活用すべきだと思います。野球などはもう交流を始めていますが、アー

モスト大学だけでなく、他国の大学とも国際的な交流を深めていき、スポーツに打ち込んできた学生向けの交換留学生制度を作り、海外に出て、色々な勉強、経験をしてもらおう。スポーツと語学は大変相性がよく、スポーツをしながら語学を学ぶと圧倒的に伸びます。また国際的なネットワークを構築できることはいまでもありませんし、何より、「違い」に触れることで、自らのプレースタイルあるいは意識のあり方を見直す良いきっかけになると思うのです。そういう環境を作っていく可能性が、同志社としての強みの一つかと思えます。ラグビー部で1年間留学するような試みはいかがですか。**中尾**●ぜひお願いしたいですね。それが中高から最終的に大学につながるのであれば、非常に良い機会だと思います。チームで行くより個人で行った方が文化面でも勉強になりますし、吸収できるものは大きいのではないのでしょうか。**川井**●海外からの留学生が同志社でラグビーをすることについてはいかがですか。**中尾**●ラグビーのためだけの留学ではなく、同志社の学生として学んだ上でラグ

学生アスリートの立場

ピーをするのなら、問題ないと思います。卒業生が何と言うか分かりませんが(笑)。

川井●同志社スポーツの課題という点ではいかがですか。

上山●同志社は、スポーツ選手がスポーツ推薦で入学して、そのままスポーツだけでやっていける大学ではないですね。私自身も学生時代、インカレなど全国的な大会に出る場合に、先生からの理解は少ないと感じていました。欠席届を出しても考慮してくださらない先生は非常に多かったです。そうすると、練習時間を割いたり単位を落としたりしてまで全国大会へ行くのか、全国大会に出るはいけないのか、などと悩みました。そのあたりについて体育会の学生にとっては、部活と先生との間の理解を大学からしっかりと促してもらえればと思います。

川井●今のお話を伺って、特に2点関心を持ちました。まず欠席の扱いですが、同志社は特殊なんですね。アスリートが「学生」扱いする大学なんですか。一方で、公欠を頻繁に出す大学もかなりあると聞



中尾 晃氏
 連携活動外課大高中大同志社
 指導者/顧問
 G M ラグビー部強化型
 大学ラグビー部

学校に行きたいという強い希望を持っていました。そういう所は何とか歯止めを効かせられるような形にしたいと思います。私の学生時代、最初は岩倉のグラウンドで練習していました。当時は同じ場所でも中高大が練習していましたので、高校生が大学生の胸を借りることもありました。当時の高校は、そのような環境があったから強くなったという話もありました。一緒に練習や試合を行う機会をいかに作れるかということだと思います。

川井●優秀な選手が流出する理由はどこにあるのですか。

古城●もつと高いレベルの練習をすれば強くなると選手自身が思っているからです。例えばテニスの場合、いま関西は負の連鎖です。良い選手はほとんど関東に

きます。どちらが正しいのかという問題より、同志社としてどうあるべきなのかという問題ですね。大事なお話だったと思います。もう1点、これは少し穿つた見方をしますが、日本では広告のために大学がスポーツを支援している側面があることは否定できません。そもそも誰のための強化、支援なのか考えた場合、同志社はあくまでも「学生」のためという視点を持ってきたように思うのです。アスリートだけでなく、音楽や演劇など、他の分野で活躍する「学生」に対しての支援が必要であると。他方、安易に公欠を認めるということは「学生」の学習権をないがしろにすることになるという視点も忘れてはいけません。とはいえ、原則論で話を進めても、せつかくこれから能力を伸ばそうとしている人にブレイキをかけることになりかねません。今後はそういったバランスも検討する必要がありますかと思えます。個人的には大会運営側が取り組むべき課題と考えていますが。他にも同志社スポーツの課題があればお聞かせください。

道永●監督会でも問題になるのですが、流れ、関西には良い選手がいなくなるから、他の良い選手も関東へ行く。関東には指導者、施設、練習の機会という、3つの良い環境があるからです。また、優れた選手と練習すると、自分の一番弱い部分が引つ張り出されます。関東にはコーチングのできる常駐する指導者が整っており、練習相手、指導者という点で改善すべき課題が多くあります。また、同志社は施設面での課題も多いと思います。京田辺キャンパスにはかなり充実した体育施設がありますが、テニスコートに関してはまだまだです。室内施設の整備も必要でしょうし、今出川と京田辺という2つのキャンパスでチームが二分されているのも問題です。施設面の充実はまだまだ必要でしょう。

道永●関東をしてJOCの組織へと流れていくのは、極論すれば「そこで練習しないとトップになれない」現状があるからです。その関西版をつくらうという話もありましたけれど、そう簡単にはいかないですね。同志社スポーツユニオンとしては、東京オリンピックに卒業生を含めて十数人の選手を出すという目標を持

各クラブの交流が活発ではないようなので、今後は交流を図っていきたいと思います。それからスポーツ健康科学部や心理学部など、学部とクラブとの交流も活発にできればいいですね。現代、スポーツはほとんど科学です。どのスポーツも本場にレベルが高くなりすぎてしまいました。すべての行動には科学的な分析、証明が絶対に必要です。スポーツ健康科学部ではそのようなことも研究しておられると聞いていますので、体育会との連携もお願いしたいものです。

人材流出にストップをかける

川井●具体的な改善策をいただき、非常に勉強になりました。ありがとうございます。中尾さん、いかがでしょうか。

中尾●同志社の高校から他大学に進学する生徒の問題でしょうか。アメフトで関学へ行く、野球で言えば早稲田へ行く生徒もいると聞きます。ラグビーでも同志社中学から東海大仰星高校へ行って優勝し、今は東海大学に進学している学生もいます。その学生の場合は高校でとにかく花園に出たい、優勝する可能性のある

つていますが、同志社がその波に乗り切れていないように感じます。もちろんそれには時間もお金もかかります。原資を集めることも必要です。学部同士のつながりも、もつとあるといいですね。

中尾●「知・徳・体」と言いますが、「体」については法人内を連携するような組織が同志社にまだ無いんですね。国際交流や地域貢献を含めて、「体」について仕切るような組織があれば、もう少し同志社らしく動けるのではないのでしょうか。

法人内の連携

川井●ありがとうございます。今お話も出ましたので、法人内各学校の連携について伺いましょう。中尾さんは2014年から連携指導者をされていますね。

中尾●法人内各学校の中高大課外活動連携指導者を委嘱されています。特に今は一番二丁の強くあつた同志社中学へ指導に行かせていただいています。ただ、各校のスタンス、方針、学校スケジュールには違いがありますし、京都府と大阪府によって大会日程なども異なります。そのため、各校の指導者とのコミュニケーション

ーシヨンは一つの課題です。きちんとした指導者がおられるかどうかという問題もあります。おられる場合、私の立場はあくまでも補完的な形で支援なので、あまりやりすぎても逆に良くない。バランスの難しさを感じます。

川井●国際中高ではいかがですか。

古城●国際高校でナンバワンの選手は、大学で週5回ほど練習しています。中学3年生から高校3年生まで約4年間、大学生と一緒に練習させてもらえたことが、大きな成長へとつながったと思います。ナンバワ2の選手は高校1年生で、週1回大学生と一緒に練習する機会を設けています。

川井●上の学校の練習に参加させてもらうと、どのような良い影響がありますか。

古城●本日お越しの皆さんに共通されているのは、近くに日本チャンピオンがいたなどの環境があった点だと思います。良いものを中高生に見せるのは一番重要ですね。少し話が脱線しますが、真珠の鑑定の指導方法を聞いたことがあります。最初の良い真珠ばかりを見せていき、その中に少し質の良い真珠を一粒入れると、品質の劣っていることがすぐ分か

るそうです。ところが質の低い真珠から見えていくと、なかなか良い真珠が判別できない。スポーツ選手も、いかに最初の段階で質の高い選手たちの中に置かれるかは大きな課題だろうと思います。大学で練習する場合は体力的にもパワーも普段と全然違いますので、高校生にとっては強化面でも非常に重要な経験ではないかと考えます。その上で、選手が吸収してきたものを再現させる機会をどう与えていくかが、高校の指導者としての課題です。この生徒は大学での練習でどういうものを見てきたのか、これから何をしようとしているのかを読み取り、それをサポートすることが私の今の課題です。

上山●私の学んだ同志社香里中高にはアーチェリー部がありません。作っていたければ嬉しいですが、総長杯にもアーチェリーは無いそうですが、中高大の交流は大事だと思えます。それを大学側から積極的にしてあげることが必要だと思います。これは連携ではないと思いますが、法人内の中高生にとっては同志社大学に凄い選手がいれば、その選手を目標に頑張ろうとする環境・雰囲気があると思う

社大学アーチェリー部出身ですので、その点でも交流ができています。高校生のうち必ず数人は大学進学後もアーチェリーを続けてくれますが、高校卒業時点で止めてしまう生徒も少なくないのは残念です。

川井●アーチェリーを大学で始めた場合、どのレベルまで行けるものですか。

道永●他大学では、大学から始めて2年生で全日本のトップレベルまで行ったケースがあります。アーチェリーの場合は骨格が重要なのですが、その選手は弓を構えてパツと引いた時の格好が抜群でした。ですから今からアーチェリーを始めても、東京オリンピックを狙える可能性があるわけですね。

川井●全然別のスポーツをしていたとしても、一度弓を引かせてみたら金の卵である可能性があるのですね。リクルーティングに今の視点を生かしておられるのですか。

道永●それはそうですが、いい選手がいなくても同志社にリクルーティングするのがなかなか難しいところが課題です。

東京オリンピックも見据えた 今後の強化・支援策

川井●ありがとうございます。学校法人同志社として取り組める支援、強化策、改善策について、ご提案がありましたらお願いします。

上山●もう少しオリンピック種目を法人内の中高校でしっかり埋めていければ、最終的に大学が上がったときに目指せることが増えるのではないかと思います。例えば香里中高にアーチェリー部を作ってもらえれば、私も指導に行けます。それから4年後に向けての強化策としては、やはりパラリンピックにも注目してほしいです。今であれば陸上、卓球、アーチェリー、水泳、カヌー、射撃、トライアスロンあたりは、既存のクラブでパラリンピック選手を輩出できる競技かなと思います。オリンピック選手と違ってパラリンピック選手は、大学の4年間で育てることが可能だと思います。来年の大学1年生で、もし障がいを持たれていて、何もスポーツをやっていないけれど興味はある、でも何をすればいいのか分からないという学生が入学されたら、今言ったような競技を大学から教えてあげてほしいです。そうすれば、私の後に続くパラリ

ンピアンが出てくるのかなと思います。リオでは、カヌーなら、筑波大学の瀬立モニカ選手、水泳は近畿大学の一ノ瀬メイ選手、卓球は早稲田大学の岩淵幸洋選手という学生選手がいましたが、同志社大学からはゼロだったので、今後ぜひ増やせればと思います。

川井●パラリンピックのお話は、おつしやる通りだと思います。東京でオリンピックが開催されることよりもむしろ、パラリンピックが開催されることの方が社会的なインパクトが大きいと個人的に考えています。対外的にどの程度認知されているか知りませんが、同志社というのは、障がいを持つ学生への支援が整っている大学の一つなんです。そういう大学であるからこそ、パラリンピックを目指したいという学生が増えていけば同志社教育にとって大きな意義があります。これから上山さんに色々な所で活動していただき、パラリンピック選手としての可能性のある人が上山さんのようになりたいと思っ同志社を目指してくれれば嬉しいですね。

道永●アーチェリーほど、障がいの有無

らんでですね。私が中学でラグビーをしていた頃は、大学のラグビー部で大西将太郎さん(2001年・商学部卒)が大変活躍されて、私たちにとってスーパースターでした。そういう選手がいれば、中高生のモチベーションは上がります。

中尾●私も天理高校時代、天理大学で胸を借りる機会は非常に多かったです。天理大学の選手は高校時代から有名だった方が多かったですし、憧れも含めて目標になりました。それと同じように、同じ法人内であれば、中学生は高校生や大学生に憧れ、高校生は大学生に憧れる。そういう人間的なものが引き継がれていく関係は重要でしょうね。

川井●そういう交流があると、大学生も指導者の目を持てるようになり、視点が増えるという、教育的な意味も非常に大きいかなと思います。

中尾●そうですね。

川井●法人内高校と大学の、アーチェリー部の関係はいかがですか。

道永●同志社高校と同志社女子高校にアーチェリー部があり、毎年数人が大学で指導を受けています。各高校のコーチも同志

から生じる差が無いスポーツはありません。まったく同じルールだし、やっていくのも同じです。ただ、なかなか障がいのある方が続けられないという現状もあるようなので、大学の方で力を入れていただければありがたいです。

同志社の強みを生かした今後の強化策

川井●先程大学でアーチェリーを始めて、全日本のトップレベルまで行った学生の話がありました。例えば法人内各学校に体育の授業でアーチェリーを体験させてみる。大学のアーチェリー部のメンバーが体育の指導のお手伝いをするということとで臨時指導する。とても良い高大の連携だと思えますが、いかがでしょう。

道永●先日も授業で練習場を見ていただいた際、体験してもらいました。上手くなるだろうなという生徒が数人いました。サッカー部の生徒でしたけれど(笑)。

川井●既にやっておられるのですね。
上山●私も同志社香里中高に講演で行った際、生徒たちに体験してもらいました。すると、引ける生徒と引けない生徒がい

るんですね。素質のある生徒はこちらが何も言わなくても、ちゃんと背中筋肉を使つて引いていました。当日講演を聴いてくれた1250人の中で、アーチェリーをやつてみたいと言つてくれた生徒は何人かいました。

川井●それは可能性ががありますね。中高でテニスを教えておられる古城先生はいかがですか。

古城●テニスは背の高い生徒の方がいいです。動的な、柔軟性がある選手が良いのですが、実際に強くなれるかどうかは全然別問題です。テニスは少なくとも小学校からしつかりやつていないと、高校から始めて大学で伸びるのは難しいですね。

川井●強化という意味では、もともとやつていないと難しい競技と、大学から始めても可能性のある競技とは、違う目で見ていく必要があるのですね。例えば国際中高に大学のアーチェリー部の選手が行つて指導や体験をしてみるの、高校側からするといかがですか。

古城●ありがたいことです。本校の職員が同志社大学航空部出身のため、航空部の監督から「練習しに来ませんか」と声

れだけは申しあげたいのですが、やはりまだ日本からの出場選手は少ないんですね。これは人数の問題だけではなく、例えば同一競技で、男子は出場するのに女子がいなければミックス戦ができないなどの問題もあります。こういう課題を日本として埋めていかないといけないし、同志社大学にも協力していただきたいと思っています。アーチェリーなら初心者から始めても、4年で育つことができます。大学としてもパラリンピック選手を育成していただきたいです。

古城●これは現在、計画の検討段階に入っているのですが、国際大会を同志社で開催できないものでしょうか。早稲田、慶應などは既に始めています。プロになつていくために通過する大会ですが、そういう国際大会を同志社で開催して、大勢の選手に同志社という場所を見てもらう。多々羅キャンパスのテニスコートなどはちよつと作り替えが必要ですが、施設を少し改良して、国際大会やカンファレンスを同志社で実施する。そうなれば日本のテニス界をリードしていくことができ、関東に対抗できるような、魅力の

ある同志社になつていくことができると思います。

川井●同じような戦いを挑むべきなのでしょうか。

古城●いえ、全然違う方法です。関東には無い魅力のある同志社にしていきたいです。

川井●関東との比較の中では条件的に不利な現状にあつても、制約された中で、どう学生として、アスリートとして育てていくかが今後の課題だと思えますし、また課題の中でこそ見えてくるものがあり、他大学には無い工夫が生まれてくるのかなと感じました。自主自立の精神は本当に同志社の中では大切にしていきたいものだと、改めて感じました。もう一つは多様性についての問題です。ある大学ではスポーツクラブに所属する学生の

をかけていただきました。あるいは個人的にグライダーを触つてみたいという生徒がいたら、それも可能ですし、先日、ボクシングも体験をさせてはどうでしょうかというお話をしていたところでした。人材の探し方は今後も課題でしょうね。

川井●法人内各学校の体育の授業に、部活のメンバーが行つてもいいでしょうし、スポーツ健康科学部がチームを組んで指導していくのもいいでしょう。先程学生の視点が変わるというお話もありましたので、お互いのメリットになるでしょう。

古城●あるいは、同志社大学にはオリンピック・パラリンピックに出場した学生や卒業生が大勢おられることを法人内の中高生に周知し、今ご提案があつたように新たな競技を経験させて興味を持たせる。東京オリンピックだけでなく、将来のオリンピックにつなげていけるのではないかと思います。

中尾●東京オリンピックに関しては、可能性のあるクラブや学生を重点的に支援する策を講じることはできるのではないのでしょうか。

上山●私はパラリンピック選手としてこ



川井 圭司氏
同志社大学政策学部教授
専門：スポーツ法学

ために特別にスポーツクラスを作り、そこで学生アスリートに単位を与えています。私はこれについては強く反対する立場なんです。スポーツに特化するのならプロにすべきです。本当に学生、アスリートのためにスポーツを活性化させたいと言うのであれば、お互いにとって良い環境であるべきです。これは「スーパーマンになれ」という話につながっていくと思えますが、トップの選手もそうでない選手も一緒に作り、そのゴールは中でお互いが伸びていく。そのゴールは、恐らく大学4年間でパフォーマンスを最大に上げることだけでなく、今後の人生を考えたときの、それぞれの目標に向かう先にもあるのではないのでしょうか。とはいえ、道永さんのようなトップの選手がいる影響は非常に大きいと思いますので、トップ選手にも同志社大学や法人内各学校に魅力を感じていただけて入つていただくよう、我々教員もモチベーションを高めながら頑張つていきたいと思えました。またご指導いただければありがたいです。本日は誠にありがとうございました。(2016年12月15日)